

活動報告

中規模授業におけるアクティブラーニング —平成29年度商学部FD講習会&ワークショップ—

竹村 亮*, 山根龍一, 高久保豊, 山本篤民, 金 恵鎮, 高橋めぐみ, 小川睦美

日本大学商学部

Report on the FD Workshop at Nihon University College of Commerce

Ryo TAKEMURA, Ryoichi YAMANE, Yutaka TAKAKUBO, Atsutami YAMAMOTO,
Hejin KIM, Megumi TAKAHASHI, Mutsumi OGAWA

College of Commerce, Nihon University

We report on the FD Workshop on active learning techniques held at Nihon university college of commerce on 26 October 2017.

キーワード: アクティブラーニング, グループワーク, eラーニング, LMS (Learning Management System)

Keywords:

Active learning, Group work, e-learning, LMS (Learning Management System)

はじめに

聴いたり調べたりして獲得した知識を, 自身の考察を経て内化し, それをさらに自身の言葉で発表・表出することで外化する, という学習が本稿で考えるアクティブラーニングである(竹村他, 2017)。学生のアクティブラーニングを実現するために, これまでさまざまな手法が開発され提案されている。もちろん, すべての授業で同じようなアクティブラーニングの手法を適用できるわけではないし, 個々の授業の目的や内容, 学生数, さらに学生側の目的や目標等に応じて適切な授業方法がある。一般に言われるようなアクティブラーニングの手法が適切とは言えないような授業もある。

しかし, だからといってなにもしない, 自分の授業は今まで通りで良いと考えるのはどうだろうか。学生が求めるもの, 学生に必要なものが変化していくなかで, 今までどおりの授業内容, 今までどおりの授業方法でよいのだろうか? 教員なら誰しも学生の成長を願い, できる限りそのための手助けをしたいと考えるだろう。アクティブラーニングの手法はそのための手段の一つであり, その目的に適うのであれば, アクティブラーニングにこだわる必要はないし, 全員がそろって同じ方法を用いる必要もまったくない。重要なことは, 個々の教員がそれぞれ, その時々の学生の目的や状況に合わせて, つねに, 少しでも授業改善を図り続けることではないだろうか。

*E-mail: takemura.ryo@nihon-u.ac.jp

投稿: 2018年1月9日 受理: 2018年1月29日

しかし、この「つねに」というのがとくに難しい。誰もが初心を忘れてしまうし、学生よりも自身の都合に合わせた授業を行ってしまうこともしばしばあるのではないだろうか。本稿で紹介する講習会のような場は、授業を受ける学生のことを考えたり、授業改善の意思を思い出すためにも、多少なりとも役に立つのではないだろうか。このような場で、諸先生方の授業上の工夫を聞き刺激を受けることで、少しでも授業改善の役に立てていただけるように、商学部FD講習会はこのような意図から企画されている。

以下では、2017年10月26日に本学商学部で開催された「平成29年度商学部FD講習会&ワークショップ」について紹介する。本講習会は前年度に引き続き、商学部学務委員会および教育改善委員会の主催によって開催され、日本大学理事長特別研究「自主創造型パーソン」の育成を目標とした全学共通教育における効果的なアクティブ・ラーニング開発に関する研究—学部横断型教育の実現と中途退学者防止対策を含む学修支援体制の構築について—（代表：近藤健史）の協力を受けている。本講習会は、商学部教員による発表を中心とする講習会と、実際にグループワークを行うワークショップの二部構成で行われた。

ワークショップ「グループワークの方法と実践」では、以下のような山根の講演に続いて、高久保を中心としたグループワークを行った。

1 山根龍一「グループワークについて考えたこと—全学FDワークショップ2017に参加して—」

全学FDワークショップの報告と、それに基づくグループディスカッションに関する問題提起がなされた。グループディスカッションにおいては、ディスカッションのノウハウとしての知識と、議論するテーマに関する知識の、異なる知識が必要となる。対象となる学生や授業目的・内容に応じて、どのような知識の習得を目指すべきかを検討する必要がある。

2 高久保豊「グループワーク・ディスカッション・プレゼンの方法と実践」

山根の基調講演に基づき、グループワークについてグループワークによって考察した。ここでは、グループワークの問題点の解決策等の提示は敢えて行わず、グループワークを成功させるためのアイデアや問題点等をできる限りたくさん列挙すること、また教員がグループワークを実際に体験してみることが目的とされた。

講習会「中規模授業におけるアクティブラーニング」では、以下のような発表が行われた。

3 山本篤民「グループディスカッション・プレゼンの方法」

独自の起業プランの作成を目的として、事前課題（起業プランの設計）に基づくグループディスカッション・グループプレゼンの方法が紹介された。6人で1つのグループを構成し、発表者（1人）・司会（1人）・コメンテーター（4人）の役割を全員が交代で担当する。

4 金恵鎮「グループワークでの能動的学修」

韓国語運用能力の向上を目的として、グループで韓国語の文法・発音・表現を主体的に学習するグループワークが紹介された。学修者は韓国語のプレゼンテーションと他グループの発表を通して、場面別の韓国語会話と多様な韓国語表現を復習する。

5 高橋めぐみ「レポート管理へのLMSの利用」

学生とのインタラクティブな授業を実現するために、講義冒頭での数問のYes/No questionを取り入れる方法が紹介された。このようなクイズを通して、授業の復習と次の学習への動機付けを行う。また、大人数授

業でのレポート管理にLMS (Learning Management System) を用いる方法が紹介された。紙でのレポート管理と比べて、LMSによる電子ファイルでの管理によって、教員の作業負担が軽減される。

6 竹村亮「eラーニングを利用した小テスト・グループワーク」

eラーニングでの事前学習に基づくグループワークの方法が紹介された。グループ分けの方法、グループの人数、全体のグループ数、成績評価の方法、欠席者や遅刻者への対応、消極的な学生への対応等について問題提起がなされた。

7 小川睦美「語学教育におけるアクティブラーニング」

学生のアクティブラーニングを実現するためのLMSのさまざまな活用方法が紹介された。スマートフォンで英会話動画を撮影しLMSにアップロードして共有したり、各自で英単語を調べてLMS上でクラス全員と共有する方法、LMSにアップされた英語記事の要約、グループワークによる英語記事の相互説明等の方法が紹介された。

とくにグループワークに関しては、全員に何らかの役割を与えることの重要性が上記の発表から示唆される。これにより、全員が何らかの形でグループワークに参加し、不参加者を減少させることができる。また他方で、グループワークを行った場合の成績評価や、欠席者や遅刻者への対応等の問題点も指摘された。

以下では講習会で配布された資料を改訂したものを紹介する。また、本稿の最後に、本講習会の参加者から寄せられた感想やコメントを紹介する。

1 グループワークについて考えたこと —全学FDワークショップ2017に参加して—

山根 龍一

① はじめに

2017年9月7日・8日の両日、「大学教育における課題の開発に向けて—教育能力の開発 (Faculty development) を企画・運営できる人材の育成—」というテーマで行われたワークショップに参加した。具体的にはまず、日本大学各学部の教職員6～7名のグループに分かれ、司会進行・記録・発表の役割分担（セッションごとに変更）を行った。その上で、制限時間を設けて「KJ法・二次元展開法」「学修目標」「学修方略」「学修評価」の各セッションを行い、最終的にカリキュラムを完成させる、というものであった。

本稿では、上記の体験から触発された考察を記述する。具体的には、グループワークの主要方法の一つであるディスカッションについて考える。すなわち、「グループワークの一環として授業でディスカッションを行う場合、どうすれば実質的效果が得られるか」が本稿の問題意識である。

② 「技法・ルール」について

授業で生産的なディスカッションを行うにはどうすれば良いか。第一に考えられるのは、個々のグループが以下の「技法・ルール」を共有することである。

- (i) 発言する際には主張と根拠を明示する。
- (ii) 質問することの意義を理解する。

(iii) 批判と否定（非難）の違い，特に批判の意義を理解する。

(iv) 司会の役割を理解する。

(v) ファシリテーターの役割を理解する。

これらを共有することが，どうしてディスカッションを生産的にすると言えるのか。

まず (i) を共有しておけば，発言（発表）者の「主張と根拠の関係は適切か」という，発言（発表）に対する注目ポイントの一つが明瞭になる。そうすれば，どこに注目すれば良いかが分からず発言（発表）を漫然と聞き流すことは少なくなる。また，(ii) と (iii) を共有しておけば，質問や批判は，難癖をつけたり論破したりするために行うのではなく，質疑応答を通して発言（発表）の趣旨を明確化したり，論理展開を補強したり，新たなアイデアを発見したりするためのものであることが理解でき，議論の活性化が期待できる。

さらに (iv) と (v) については，必ず設置しなければならないことはない ((i) ~ (iii) を共有するだけでもディスカッションは機能する) もの，設置した方が教育効果は高まる。と言うのも，司会として議論を整序し，ファシリテーターとして議論を促進させるためには，それなりの技能と経験——例えば討議の場全体を見渡す俯瞰的な視野など——が必要になるからだ。(就職活動の選考方法としてグループディスカッションが採用されていることに鑑みても，司会やファシリテーターの体験が学生にとって有益であることは明らかだろう。) ただ，ハードルは高く，設置してもうまく機能せずに終わることも少なくない。

以上は主として，筆者が担当しているゼミナールの学生たちの様子をもとに考察したものである。そして，少なくとも (i) ~ (iii) に関して言えば，具体例を示しつつ講義形式で丁寧に説明し，何度か実践経験を積み重ねれば，十分共有可能である。

③ 「知識・枠組み」について

では，「技法・ルール」を共有すれば，生産的なディスカッションができるのだろうか。仮に，筆者の専門である日本近現代文学関連の授業で，任意の小説をテーマにディスカッションを実施する場合を考えてみよう。その場合，いきなり小説を読ませてグループで議論させても，うまくいくとは考えにくい。なぜなら，以下の要素をどれだけ持ち合わせているかに応じて，参加者一人ひとりの小説に対するアプローチの仕方が異なるからだ。

(i) 語彙・注釈レベルの知識

(ii) 小説の時代背景（日本近現代史の基礎知識）

(iii) 小説を分析・思考するための枠組み（文学理論）

(i) と (ii) については，ある程度詳細な注釈の付いた本文を事前に学生に配布し，あらかじめ目を通してきてくるなどの工夫をすれば，クリアできないことはない。だが，近年の学生たちの“歴史離れ”を念頭に置くと，(ii) について一定時間講義することも必要である。では (iii) はどうか。これを共有することは必要だろうか。

例えば今日の文学研究で小説を扱う場合，テキスト論や物語論の共有を前提に議論するのが当たり前になっている。そうしなければ，議論が印象批評や作者の発言（意図）の援用に流れ，生産的なものになりづらくなる（印象批評は水掛け論になりやすく，作者の発言等の援用は，小説外部の情報を多く持っている者とそうでない者との差が生じやすい）。そのため，テキスト論その他の，小説を客観的・論理的に読み解く枠組みを最低限共有することが，比較的公平な議論の場を確保するための要件となる。

だが，この枠組みの共有には時間がかかる。それは，理論という抽象的なものを具体例を使って理解させるにはそれなりの時間が必要なためである。実際，筆者が担当する「ゼミナールⅠ」では，学期初めに3コマから4コマを使って講義を行っており，文学関連の他の授業でディスカッションを行う際にも，同程度の

時間が必要になると予想される。

④ 終わりに

以上の考察をもとに、「グループワークの一環として授業でディスカッションを行う場合、どうすれば実質的效果が得られるか」という問いに答えると、「参加者一人ひとりが、ディスカッションの基本的な技法・ルールと、テーマに即した最低限の知識・枠組みを共有すれば良い」となる。要するに、「議論のための前提を共有する必要がある」ということだ。

しかしながらこのことは、言うは易く行うは難い。月並みな結論ではあるが、授業内でディスカッションを実施する際には、授業内容の特性、半期／通年といった時間的制約、履修人数の多寡などを慎重に考慮した上で、学生たちが最も合理的に前提を共有できる授業設計を、各担当教員が個別に考える必要があるだろう。

2 教育改善運動としてのFDワークショップ —グループディスカッションでグループディスカッションを考える体験—

高久保 豊

① はじめに

以下の記述は、2017年10月26日に実施された「平成29年度日本大学商学部FD講習会&ワークショップ—中規模授業におけるアクティブラーニング—」において、筆者が「ワークショップ：グループワークの方法と実践」のなかで「グループワーク・ディスカッション・プレゼンの方法と実践」を担当した際の経験に基づくものである。

このワークショップを担当するにあたり、筆者がどんな考え方に基づいてどんな狙いを設定し、事前にどんな準備を行い、どんな実践を行い、どんな結果ならびにフィードバックを得たのかをめぐり、記録を兼ねて、若干の考察を行うこととした。

② ワークショップ担当者としての狙い

筆者がこの講習会&ワークショップを先導する教員と相談しながら事前に苦心した点は3つある。参加者の充足感に留意したこと、参加への敷居を低くしたこと、教育改善運動として位置づけたことであり、これらを実施の狙いとした。順を追って説明したい。

1つめは、今回のワークショップがワークショップとしての特徴をできるだけ発揮するために、「参加してよかった」という実感を得て頂くことが最重要と考えた点である。講習会&ワークショップといえ、能動的な研鑽という動機による参加者がいることは言うまでもないが、義務による出席という事情もあるだろう。満足感より大きい疲労感をもたらすようでは、教育改善関連の実践として適切でない。この点での工夫を試みた。

2つめは、グループディスカッションを実施することに対して教員がしばしば抱く疑問点をなるべく払拭しようと努めたことにある。言い換えれば、徹底的に敷居を低くしようと考えた点である。

グループディスカッションの技法に関するレポートは多種多様であり、ネット上で容易に検索することができる。しかも、それらの技法にはさまざまな流派があり、一読してそれらの違いを判別するのは容易でない。「ファシリテータ」という言葉一つをとっても、それがグループディスカッションのメンバーにとって空気のような存在であるのが理想なのか、ある程度の進行をリードすることが不可欠なのか、これらを両立すべき存在であるのか。こうした点に過度に悩まされると、教員の意欲を減退させる元凶となる恐れがある。

そこで、シンプルかつ等身大のグループディスカッションを通じて「これなら自分でもできるのでは」という気持ちになってもらうことを企図し、事前準備を進めていった。

(注：中野(2003)によるファシリテータの解釈がその一例である。筆者もこの設計思想に基づき、外部団体主催のグループディスカッションで応用し、参加者約120名を12卓・10人グループに分けて実施してきた経緯がある。ただし、この場合のファシリテータは訓練を受けてプロ資格を得た人たちであり、確かに誰でも容易にファシリテーションができるわけではないように思料される。現実との折り合いが必要という考え方は、こうした体験に基づくものである。)

3つめは、教育改善運動のひとつとして位置づけたことである。大規模組織に生じやすい問題点として、多様性と団結のジレンマがある。一つの組織がある大方針を目指し、意思を統一して進めることにはメリットがある。反面、多様なメンバーを擁していること自体もメリットであるのに、統一という大義名分のもとで種々の縛りを設定することがかえって個々の特長を削ぎ、本来の輝きが失われかねないという状況を想定してみたい。

FDは教育改善活動であり、改革の取組みである。何が正解であるかは未知数であり、試行錯誤を通じて見つけていくべきであろう。グループディスカッションを行うとか行わないなどの個々の具体的な手法に関しても、同様のことが言えるのではないか。

つまり、現場からのフィードバックを活かし、絶え間なきプロトタイピングを経てはじめて正解が見えてくる。教育改善は、そもそも静的なものでなく、動的なものでなければならない。はじめから「正解ありき」を前提として特定の型への収斂を徹底するアプローチでなく、常に自主創造を繰り返していく気風を養うことが有効であろう。今回のワークは当初から100点を目指すのではなく、80点か、あるいは40点か分からないけれども、今後、より適切な指導方法を見出していききっかけになればよいと考えた次第である。

③ 設計方針、事前準備ならびに使用したツール

(1) 設計方針：グループディスカッションでグループディスカッションを考える

今回は、(i)「グループディスカッション」の手法を用いて、(ii)「グループディスカッション」を考えることとした。ただし、主眼を(ii)に置いた。参加者の能動的な体験が大事であると考えたためである。(i)は「上から目線」にならないように留意し、参加者になるべく気軽に参加できるように設計した。参加に対する敷居を低くすることが狙いである。

ワークの流れとしては、まず、ワークに先立って行われた山根龍一准教授による報告「グループワークについて考えたこと—全学FDワークショップ2017に参加して—」を基調報告として位置づけた。これに続いて行われるグループディスカッションは、基調報告で得られた事柄や生じた疑問点をめぐる意見交換に専念することとした。

(2) 事前準備と使用したツール

グループディスカッションには、ブレインストーミング&KJ法をはじめ、さまざまな技法がある。今回はなるべく平易な技法を採用し、主催者として活用するのも参加者として議論に参画するのも「これならできる」と感じてもらえることに事前の神経を注いだ。

そのためには、応用可能性の高いツールを用いるのが便利である。そこで、ワークのためのシートを事前に準備した。主催者にも参加者にも容易に進めて頂くためである。

想定したグループディスカッションの流れは、以下の通りである。

まず、山根准教授の基調報告(約20～25分)に続き、グループディスカッションをめぐって、①山根報告の中で印象深かった点、とりわけ、a) 同じような見解を持っている、b) 異なる見解を持っている、c)

新たな発見を見出したという3つの事柄、ならびに、②山根報告の中になかった自身の観点、という4つを中心にして各自メモ書きしていただき、グループディスカッションを進めることにした。グループメンバーの構成としては、4～5人グループを5卓くらいとるように想定した。それぞれの卓で、進行役、書記、発表者を設けてもらい、20分の時間をとって全員の発言をお願いした。その際、1人当たりの発言時間が4分程度になる、という目安をあらかじめ示すこととした。

以上を基に、書記が使用する用紙として、A3判横書き1枚を区切った用紙を準備した(=図表1)。これは、記入用のほか、参考資料として参加者全員に1枚ずつ配布した。

書記には、できるだけそれぞれのマスに言葉が入るように協力を求めつつ、そのようにならなくてもまったく差し支えないことをあらかじめ伝えることとした。

図表1 グループディスカッション ワークシート

グループディスカッション ワークシート

メンバー表 (進行役 ^{ファシリテーター} に , 書記に , 発表者に) ※ペンネーム使用可

グループ名	メンバー	メンバー	メンバー
	メンバー	メンバー	メンバー

お題：「日頃、グループディスカッションをめぐって、わたしの思うこと！」

各グループでは、おひとり4分以内の持ち時間でご紹介ください。あわせて ____ 分間 (____ 時 ____ 分まで) となります。
(全体発表の持ち時間は1グループにつき ____ 分となります。)

基調報告に対する皆さまのご意見 キーワード：

A つよく共感する事柄 	B 異なる感触を持つ事柄
C 新たに発見した事柄 	D 基調報告になかった事柄

発表者には、「全体セッション」にて3分で発表してもらい、参加者全員で共有することとした。その際、とくに議題としてほしいキーワードを1点にしぼり、一言で紹介してもらうことにした。このキーワードはホワイトボード上に大きく記すことにした。

また、ワークシートにメンバーの氏名を記載する欄を設け、ペンネームで差し支えないこととしたほか、グループの団結心を育てるため、アイスブレイクを兼ねて「グループ名」を付けて頂くことにした。シンブルを心掛け、凝ったからくりは作らないことにした。

④ 実際の進行ならびに得られた結果

(1) 実際にかかった時間

趣旨説明とグループ分けが13分、グループディスカッションが27分、全体セッション（代表者による発表会）が20分であった。その後にまとめの時間で5分を要した。

このワークショップに先立ち、発表者の話を聞く形式の講習会など、わりと長い時間にわたって参加者は座りっぱなしであったため、心身の疲労回復を兼ねて、グループ分けの冒頭で参加者全員に起立して頂くことにし、会議室の机の配置も故意に崩すことにした。また、グループディスカッションの参加者にはあらかじめ、終了時刻の目安を示しておいた。あわせて**図表2**「グループディスカッションの様子」を参照されたい。

図表2 グループディスカッションの様子



(2) 実施結果（内容面）：全体セッションでの発表とワークシートに記載された意見

全体セッションでは、4グループの代表者による発表があった。ワークシートを読むと、ここからどのグループも進行役、書記、発表者を決めるほか、「タイムキーパー」や「アドバイザー」などの役割を全員に付与し、協力して進めてきた様子がうかがわれる。各グループのキーワードを列挙すると、**図表3**「グループディスカッションのキーワード」の通りとなった。なお、図表中における〔 〕の部分は、筆者による意味上の補足である。

また、基調報告に「A つよく共感する事柄」、「B 異なる感触を持つ事柄」、「C 新たに発見した事柄」、「D 基調報告になかった事柄」をまとめると、それぞれ**図表4**「基調報告に対する参加者の意見」の通りとなった。なお、図表中の「GD」は「グループディスカッション」の略（記載のまま）であり、〔 〕で括った部分は、筆者による意味上の補足である。また、図表中の下線は、以下のまとめの伏線として筆者が引いたものである。

図表3 グループディスカッションのキーワード

チーム Fomik	教育効果を高める手段であり、目的ではない
チーム 3年	長い目で見てください
チーム R	グループディスカッションの難しさ
チームヤマネ	基礎知識の有無などを含む前提条件 [が成功のカギ]

図表4 基調報告に対する参加者の意見

	チーム Fomik	チーム 3年	チーム R	チームヤマネ
A つよく共感する事柄	<u>GD に向く授業かどうか。</u>	<u>前提となる知識が必要。チャレンジングな姿勢。</u>	グループディスカッションを単なる会話ではなく、 <u>質の高いものにすることは、非常に困難である</u>	①~③ (主張と根拠の明示、質問の意義、批判と否定の違い)と④、⑤(司会・ファシリテータの役割)は大きな違い。工夫をしている(動画)。 <u>基礎知識の必要性。</u>
B 異なる感触を持つ事柄	<u>300overの授業でどう取り入れるか。教育としての技量[に依拠]</u>	学術的ディスカッションは難しい。 <u>ディスカッションの設計(目的達成のレベル)が大事。</u>	<u>ディスカッションの技能のレベルが高すぎるのではないか。</u> 文学以外の科目についても考える必要がある。	①知識の量は学問領域による。②知識の共有は必要。授業の質に影響。③すべての科目に当てはまるとは言えない。④専門基礎研究では難しい。⑤評価が難しい。⑥論理性。
C 新たに発見した事柄	GD 2つの目的： ①GD を通して専門的議論を深める。 ②GD でコミュニケーション。①、②学生ごとに受け止め、成長。 <u>教員の準備 [が大事]</u>	ホメルという効果も考える。「3年」という長い時間が <u>必要。</u>	大学生のレベルが、世界的に低下しているということを再認識した。	①1 クラスの人数 <u>80名</u> 。②LMS の利用。③動画
D 基調報告になかった事柄	①教育効果を高める：学生の主体的な行動。費用対効果：適切な目的の設置。②教育のための手段であり、目的でない： <u>取り入れられる授業とそうでない授業</u> 別の方法。③テーマ設定が大事。④効果がないこともある(同じ議論の繰り返しとなる)。	実務的ディスカッション(社会に出てから使える。妥協も必要)。ディスカッション後のコメントも活用する。	①議論をするためにはどのような事前準備をさせるのか。 <u>事前準備の必要性。</u> ②グループディスカッションをまとめるリーダーの <u>育成。</u>	<u>燃えないグループをどうするか。</u>

⑤ 若干の考察

参加者から寄せられた図表3と図表4の意見をまとめると、グループディスカッションという手法に関して、以下の諸点に集約することができるようである。

- (i) 授業科目のなかみ、レベル、狙い、受講者数などによって、手法の適用可能性が異なる。
- (ii) 手法に関する教員の基礎知識、技能と熱意による。授業の準備が必要。
- (iii) ファシリテータならびにその取りまとめ役の育成が前提として必要になる。
- (iv) 個々の学生の成長という視角が不可欠。手法になじめない学生への目線も重要。
- (v) 即効性を求めるのではなく、長い目で取り組む必要がある。

なお、実施結果（進行面）として、今回のグループディスカッションを通じて参加者により感じられたことがアンケートに回答する形で寄せられた。そのなかの1つとしてとくに目を引いたのは「このグループディスカッションというワークを通じて、アカハラ・パワハラのような圧力を実感した。よろしくない」との趣旨を記したものであった。

グループディスカッションをめぐる「就活中にも実施されるから学生にとって一石二鳥」とか「社会に出てからも役立つ技法である」という趣旨の意見が今回も出されていたが、上記のような負の側面が具体的に表現されたことには留意が必要であろう。

この指摘を受け止め、前向きに解釈して、ワークの進め方における修正の必要性を検討しなければならないだろう。つまり、全学生に対して一律に課すべき手法としてグループディスカッションを画一的に捉えるのでは、たとえばコミュニケーション障害を克服しようとしている学生に対して適切ではない。こうした点を忘れないようにするべきであるという警告として非常に重要なコメントを頂戴したものと受け止めている。

⑥ 結びに代えて

もとよりグループディスカッションという手法が万能であるはずがない。筆者はそもそも全教員が画一的にこの手法を用いることに賛成していない。しかしながら、だからこそ今回は敷居を低くした。これをきっかけとして「自分にも工夫ができるのではないか」という希望と意欲を持つ教員が数名でも出てきたならば、教育改善の前進と言えよう。

「完璧なFDが存在する」という命題を唱える論者がいるとすれば、筆者はこれを退けるであろう。むしろ、教育改善運動として意識することが大事であり、現場の声がすべてである。今回、多くの参加者を得たことそのものが、こうした運動の静かな高まりを表現するものであり、今後も多くの参画を得ながら育てていくべきであろうと思料する。

⑦ 参考文献

- 中野民夫 (2003) 『ファシリテーション革命：参加型の場づくりの技法』 岩波書店.
- 堀 公俊 (2004) 『ファシリテーション入門』 日本経済新聞出版社.

3 起業プランにもとづくグループ討論

山本篤民

① 当該授業名

アントルプレナーシップ論

② おおよその参加学生数

70～120名

③ 目的

本講義では、起業の意義や起業家の役割、起業にあたって求められる知識について学ぶ。座学として起業を学ぶだけではなく、学生自身が起業のアイデアをまとめて、他の学生にその魅力や可能性を伝える能力も身につけることを目的としている。起業のアイデアや事業プランを作成する過程で、類似の企業の事例を調べたり、競合しそうな企業の経営を分析したりするといった能動的な学修を促す。

④ 事前準備・必要機材等

「アイデアシート」を作成する。アイデアシートには、事業の概要をはじめ、想定する顧客や取引先、価格、類似企業や競合企業との比較、必要とされる資格や許認可などを調査したうえで書き込む。

どのような点に注意してアイデアシートの各事項を記述するかということについては、事前の講義の際に説明をする。次項で述べる「アイデアシート」のグループ発表は、14回の講義のなかで、10回目もしくは11回目に該当する。

⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

【グループ発表・当日】

- ・(無作為に)6人のグループをつくる。
- ・グループ内で発表の順番、司会(タイムキーパー)の順番を決める。
- ・発表者が5分間で「アイデアシート」の内容を発表する。
- ・司会をのぞく、残りの4名が1分ずつ良かった点や改善点をコメントする。
コメントをレポート用紙に記述する。
- ・6人全員が1回ずつ「発表者」と「司会」をする。
全員の発表が終了したところで、グループのなかで一番報告が良かった人の名前をレポート用紙に記入して提出する。

【グループ発表・翌週】

- ・各グループで最も評価が高かった人が、受講者全員の前で「アイデアシート」を発表。
- ・発表者と受講者との間で質疑応答を行う。
- ・教員は最後に簡単なコメントをする。

【グループ発表・翌々週】

- ・「アイデアシート」の改正版を提出(グループ発表で受けた指摘を改正する)。

⑥ 実施する上での留意点

- ・「アイデアシート」を作成するうえでのポイントを十分に説明する。
- ・必ず「アイデアシート」を作成したうえで参加することを促す。
- ・「アイデアシート」の作成が成績評価に含まれることを周知する。

⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

【学生】

利点

- ・他の学生のアイデアやプランを知ることができる。
- ・自分のアイデアやプランに対して、他の学生から意見がもらえる。
- ・プレゼンテーションやディスカッションを経験できる。

難点

- ・事前準備。
- ・グループ発表の当日に欠席をすると評価が下がる。

【教員】

利点

- ・受講生が多く、教員ひとりでは、個々の学生に対してコメントすることができないが、学生同士でコメントしあうことでそれを補うことができる。
- ・能動的に起業について学修（業界・企業研究など含む）をするようになる。

難点

- ・グループによって差異が生じる（盛り上がる場所、盛り上がらない場所）。
- ・受講人数が多いと、グループの代表発表ができないところが多くなる。

4 グループワークでの能動的学修

金 恵 鎮

① 当該授業名

韓国語／朝鮮語 3

② おおよその参加学生数

35名

③ 目的

- ・グループワークを通じて実践的な韓国語運用能力を高める。
- ・韓国語会話力の向上を目指す。

④ 事前準備・必要機材等

多様な状況別・場面別の韓国語資料を準備する。

⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

(1) グループワークについて説明する。

- ・学修目的「学修者の能動的学修により韓国語会話力を高める」とグループワークの進め方について説明する。
- ・学修成果のプレゼンテーションまでのスケジュールと学修ステップについて説明する。
- ・教員からのフィードバック（各グループで作成した韓国語原稿の添削や指導を行う）と学修支援サポート（韓国語発音とイントネーションを確認／指導する）について説明する。

(2) 授業内におけるグループワーク

- ・学修者が主体的にテーマ設定・役割分担を行う。
- ・グループメンバーはお互いに助け合い・学び合いながら、韓国語の原稿を作成する。

(3) 授業外におけるグループワーク

- ・各グループは授業外の時間を有効活用して勉強時間を確保する。
- ・グループメンバーはお互いに韓国語発音とイントネーションをチェックする。

(4) 学修成果プレゼンテーション

- ・各グループが韓国語プレゼンテーションを行う。
- ・学修者は他グループの発表を通して、場面別の韓国語会話と多様な韓国語表現を復習する。
- ・教員は多様な視点からフィードバックを行う。
- ・学修者は自己評価と相互評価をグループ単位で行う。

⑥ 実施する上での留意点

- ・学修者が積極的にグループワークに参加するようにグループ別の学修状況を把握しながらサポートする。
- ・グループワークを通じて深めてほしい学修項目を明確に伝える。
- ・能動的学修を実現するための対策とフィードバック方法を工夫する。

⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

- ・グループ内で学び合いと教え合うことで学修意欲の向上につながる。
- ・学修者が主体的に学び・考え・実践をすることで学修効果の向上が期待できる。

5 レポート管理へのLMSの利用

高橋 めぐみ

① 当該授業名

消費者法

② おおよその参加学生数

出席者 90～100名／レポート提出者 106名／期末試験受験者 116名／登録者 130名

③ 目的

《講義全体》消費者法領域の諸法の講義

- ・法学部における消費者法（一般法である民法の履修・理解を前提とした応用的・先端的な講義）とは異なる、商学部カリキュラムにおける消費者法の位置づけ（基本的な法律の法的知識が少ない学生が履修）をふまえると、消費者教育としての側面が必要となる。
- ・消費者被害の防止・回復についての知見の修得が一般的な目標であるが、受講者個々人の資質や能力に応じて、複数の到達目標を設定することが有効であると思われる。具体的には、①家族・有人等に生じた問題の解決へのアドバイス、②自らに生じた問題の自力解決、③①および②について、社会的リソースを利用しての問題解決、④自らの権利侵害の事実の認識、といった様々なレベルが考えられる。

《クイズ》講義冒頭でのアイスブレイクの役割

- ・基本事項の修得
- ・トリビア的な情報の紹介による関心の喚起
- ・前回の復習から当日の講義・先々の講義内容への橋渡し（すでに学修した原則に対する例外など）

《レポート》全国の消費生活センター等のウェブサイトの比較・評価

- ・消費者行政についての講義（締め切り直後に実施）に具体的な問題意識をもって臨ませる。
- ・身近な消費者被害の例、各地のセンターによる啓発等にふれさせ、消費者被害の防止・回復のためのリソースに親しませる。

④ 事前準備・必要機材等

《クイズ》

- ・クイズの作成（スライドの作成）

《レポート》

- ・eラーニングシステム（LMS）
- ・eラーニング教材（課題の作成）
- ・学生へのログイン方法・提出方法の周知・確認

⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

《クイズ》

- ・クイズを作成し、講義冒頭で学生に出題する。Yes / No で学生に挙手させ理由を問う。

《レポート》

- ・レポート課題・提出方法についての口頭での周知（開講時から何度か）。
- ・課題の作成・アップロード（6月上旬）。
- ・学生へのログイン方法等の周知・提出方法の周知・確認（アップロード以降随時）。
講義中：実際にログインさせた（ログインできない者には連絡させた）。
ポータルサイト：レポート課題、ログイン方法、ログインできない場合の対応等を周知。

⑥ 実施する上での留意点

《クイズ》

- ・誤答した学生への配慮
誤答を指摘されること（=恥の意識）によって学修意欲を低減させることがないように、対話形式の講義で必要とされる一定の配慮（誤答は、これまでの学修の結実ゆえである等のコメント）は、同様に必要である。

《レポート》

- ・LMSでのファイル提出方法の周知
LMS利用経験のない学生も多いため、提出前にトラブルの芽を摘んでおく必要がある。今回は実施しなかったが、開講時に、学生の消費者問題に対する知識や意識、受講理由等を問うアンケートを行い、経験をさせるのが有効であると思われる。
- ・入学前教育で作成したアカウントとの混同に注意する必要がある。

⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

《クイズ》

- ・講義への移行がスムーズ。また、講義の一部を効率的に対話形式で実施することが可能。

《レポート》

- ・提出されたレポートの管理・評価が容易
紙ベース、メール形式での提出の際には多大な時間と手間を要するファイル管理が、非常に容易である（一括ダウンロードすると学生番号順にファイルが整理されたフォルダが作成される）。いわゆる「コピー」を検知するアプリケーションの導入とリンクさせれば、不正行為の効率的な摘出が可能となる。

6 eラーニングを利用したグループワーク

竹村 亮

① 当該授業名

数学 A（線形代数）

② おおよその参加学生数

前期 約 40 名（履修者約 60 名）

後期 約 80 名（履修者約 100 名）

③ 目的

グループワークによる線形変換の理解。

授業前の課題で自身で考え、グループワークで他者の考えを聞き、自身の考えを説明することで、学生のアクティブラーニングを促す。

④ 事前準備・必要機材等

eラーニングシステム（LMS（Learning Management System））

eラーニング教材（簡単な解説と練習問題）（（竹村，2016）を参照）

学生のアカウント

⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

前期の授業でグループワークを行った後、学生へのアンケート結果および商学部FD講習会での示唆を受けて、後期の同授業（履修者は全員異なる）では方法を少し変更してグループワークを行った。以下、前期と後期で方法が異なる部分についてはそれを明記する。

〔前回授業〕

eラーニング課題をやっておくように指示する。事前課題をやっていないと次回の授業に参加できないことを注意する。遅刻するとグループワークに参加できないことを注意する。これらの指示・注意をポータルサイトでも連絡する。

〔授業前〕

(前期授業) eラーニング課題の成績を基にグループ分けを行う。成績の良い学生を各グループのリーダー候補として選び、その上で残りの学生を、通常の演習参加状況やeラーニング課題の記述内容を考慮しながら配置する。今回は6つ(A～F)のグループに分けた。各グループ6～7名。

(後期授業) 学生へのアンケートおよびFD講習会での示唆を受け、1グループの人数を減らし、4～5名とした。また、eラーニングの成績でのグループ分けは行わず、席が近い者を教員の指示で適当にまとめてグループを作った。後期は14グループで、各グループ4～5名。

〔当日授業中〕最初に全体に対する解説を行い、グループワーク、(後日)再度全体に対する解説を行う。

〔全体〕eラーニング課題の解説とグループ分け(30分)

(前期授業) 各グループのリーダーを決める。リーダーには演習点を与える。eラーニングの成績を基に教員から指名するが、拒否することも可能とする。

(後期授業) 各グループのリーダーおよび書記を決める。教員からは指定せずに、グループ内で選出する。

〔グループ〕グループワーク(60分)

以下の課題をグループで議論し、グループごとにレポートを提出する。

- (1) プリントの他にどのような線形変換がありうる?(2つ以上)
- (2) その線形変換を行列で表すと?
- (3) どうしてその行列で表せると言える?

グループワークの時間中は、各グループを巡回し、議論が進まないグループに対してアドバイスを رفتたり、質問に答えたりする。

グループごとにレポートを提出する(グループ全員の氏名を付記)。全員に演習点を与える。優秀なレポートのグループメンバーには後日さらに演習点を与える。

〔次回の授業〕全体に対する解説

各グループのレポートで優れたものを紹介する。

⑥ 実施する上での留意点

- 事前課題をやっていない学生や遅刻してきた学生への対応を前もって決めておかないと、当日混乱する。「参加できない」と言っておいても、当日そのような学生がいた場合、実際に排除するのは難しい。
- 後期の授業では、電車の遅延による遅刻者が数名いた。前回の授業までに、遅刻すると参加できないことを何度も伝えていたため、諦めて欠席する学生も複数いた。このような交通機関の遅延への対応をどうするかは今後の課題である。(今回のグループワークは単位習得に必須ではなく、参加すれば演習点が加算されるものである。したがって、参加しなかったとしてもそのことが成績にとって直接マイナスになることはない。)
- グループワークに参加しない(ほとんどしゃべらない等)学生をどう評価するか。活発に議論に参加していた同グループの学生と同じ成績(演習点)で良いかは疑問だが、区別するもの難しい。
- 今回は前期6、後期14のグループに分けたが、この程度であれば200～300人教室で充分実施可能であり、また教員一人で対処できるように思う。(どの程度・レベルのグループワークを目指すかによる。)
- リーダー以外は役割をまったく決めなかったが、個々のメンバーに何らかの役割を与えることが重要だ

と感じた。上記の1グループの人数とも関係するが、個々の学生がそれぞれの役割を果たすことで、グループワークに参加しない学生を減らすことができるように思う。

- 今回のグループワークの時間は60分とした。前期の授業では少し長すぎたように感じたが、後期の授業ではチャイムが鳴ってもレポートを書き終わらないグループがいくつかあり、少し時間が足りないように感じた。短かすぎても消化不良になるが、長すぎると終わりの方はダレてくる。適切な時間についても今後さらに検証する必要がある。

⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

- eラーニング課題は、学生が授業の空き時間や自宅、電車内等好きな時間・場所でできる。また、教員側は課題回収・採点の手間が省ける。
- 授業後に行ったアンケートの結果は以下の通りである。(詳細は後の節の補足を参照。)

Q1. (選択) 他の授業と比べてこのような授業は、「やる気が出る」が前期33.3%・後期48.8%、「学習意欲に変わりはない」が前期52.4%・後期51.2%で、これらの合計は前期85.7%・後期100%だった。「やる気にならない」という否定的意見は前期4.8%・後期0%だった。その他の意見として「たまにやる分にはメリハリがついていい」等の意見があった。

Q2. (選択) 他の授業と比べてこのような授業は、「理解しやすい」が前期47.6%・後期25.6%、「理解のしやすさに変わりはない」が前期33.3%・後期62.8%で、これらの合計は前期80.9%・後期88.4%だった。「理解しにくい」という否定的意見は前期14.4%・後期7.0%だった。

Q3. (選択) このような授業は、「増やした方がいい」が前期38.1%・後期48.8%、「どうでもいい」が前期28.6%・後期20.9%で、これらの合計は前期66.7%・後期69.7%だった。「必要ない」という否定的意見は前期14.3%・後期7.0%だった。その他の意見として、ここでも「基本はいつもの授業スタイルでたまにグループワークが良いと思う」等の意見が複数あった。

これらの結果から、学生はグループワークに対して大きな抵抗はなく、概ね好意的に受け入れているようである。また、グループワークは毎回ではなく、「たまに」行うのが良いようである。

また、自由記述アンケートでは、**グループワークによって考える力がつく**という意見(「今まで教わったことを駆使して自分で考えるので、そういった力が他の授業と比べてつくと思うので、とても良かったと感じました。」「良い。普通に問題を解くより考えられる。」等)や、**協働のメリット**(「自分がわからないようなことでも、他の人に助けをもらいながら解決できるので良い。」「普段仲の良い人以外と関わることで、新たな発見があった。いろいろな意見を聞くことにより、自分の考え方の幅を広げることができた。」「自分がわからないようなことでも、他の人に助けをもらいながら解決できるので良い。」等)が挙げられた。他方で、**協働の困難さ**(「他人と話し合うよりも一人の方が気楽でいい。先輩たちに気を使って発言しづらい。」「今までの内容がわかっていない人がいて少しやりづらかった。」「チームとして考えがつかってしまったときに困りました。」等)や、**通常の講義の方が良い**(「普段の授業の方が一人で集中して学べるので個人的にはいつもの方が良い。」「悪い点として、授業のスピードが落ちてしまう。」等)という意見が挙げられた。また、他に注目すべき意見として、**グループワークはたまにで良い**(「毎回はキツイかなと思うので、普段はいつもと同じような授業で、たまにそういったグループワークがあると面白いなと思いました。」「1, 2回はあった方が良いが、そんなに多くはいらぬ。」「たまにやる分には新鮮で楽しかった。」等)という意見が多数挙げられた。

⑧ 補足：前期アンケート結果

有効回答者数 21 (人)

Q1 他の授業と比べてこのような授業は

やる気が出る	学習意欲に 変わりはない	やる気に ならない	その他	
7 33.3%	11 52.4%	1 4.8%	2 9.5%	正しいか不安になった。 たまにやる分にはメリハリがついていい
合計 85.7%				

Q2 他の授業と比べてこのような授業は

理解しやすい	理解のしやすさに 変わりはない	理解しにくい	その他
10 47.6%	7 33.3%	3 14.3%	1 4.8%
合計 80.9%			

Q3 このような授業は

増やした方がいい	どうでもいい	必要ない	その他	
8 38.1%	6 28.6%	3 14.3%	4 19.0%	たまには必要 現状維持 先に進んで欲しい
合計 66.7%				

Q4 これまでの線形代数の授業と比べてどうですか？（どちらがいいか・良い点・悪い点など）

<考える力がつく>

- グループワークなどで考える力がついた。説明なしでいきなり課題をするのは大変だった。定期的に組み込むことでメリハリがついていいと思う。
- 良い点として、自分で考えるため、理解が深まる。悪い点として、授業のスピードが落ちてしまう。
- 授業を聞いて理解してきたから、自ら考えるのは正直辛かったが、勉強の姿勢は良くなったと思う。

<協働のメリット>

- 他の人の意見を聞けるので良い。 ● グループで話し合うことで共有できる。
- 一人では、気づけないことを発見できました。 ● 周り相談できるのは良いと思う。
- 一人で考えるよりグループワークの方が理解しやすい。 ● グループワークの方が良い。
- すぐに正誤が出る点は良いと思った。

<協働の困難>

- 考えるのは楽しかったけど、他の人と相談するのはあんまり。 ● あんましゃべらないからつまんない。
- 他人と話し合うよりも一人の方が気楽でいい。先輩たちに気を使って発言しづらい。
- グループワークが苦手なため、話し合いに参加できず、自分のことに集中できない。

<講義の方が良い>

- グループワークはいらないと思った。 ● 通常の講義のみが良い。 ● いつものやり方で良い。
- 授業の方が理解しやすいです。 ● 理解するのに時間がかかる。

Q5 通常の講義のみの他の（線形代数以外の）授業と比べてどうですか？（どちらがいいか・良い点・悪い点など）

<グループワーク肯定>

- 新鮮だった。
- こっちの授業の方が良いです。
- 一人で考えるより効率的な面もあり良いと思う。

<グループワークはたまにで良い>

- たまには良いと思う。

<どちらともいえない>

- 理解のしやすさに変わりはないです。

<講義の方が良い>

- 考えるのが苦手なので、通常の講義の方がありがたい。
- いつものやり方で良い。
- 通常の方が自分一人なのでやりやすい。
- 通常の講義の方が他人の答えを見てその場で自分の解答の修正や良い部分を吸収しやすい。

<その他>

- 数学好きだから楽しい。
- 他の授業は聞いているだけになってしまうが、この授業はいい。
- さまざまな方式で授業をやれるのは面白かった。
- 演習が多いため、他の授業よりも理解が深くなる。
- 線形代数以外の授業を受講してないのでわからない。

Q6 今回の「線形変換」の授業について、感想、コメント、意見等あれば書いてください。

- おもしろかったです。
- けっこうおもしろかった。
- パソコンを使った授業も楽しかった。
- 普段関わらない人と話したり、教えてもらえることができたのは良かった。
- グループワークが大変だった。
- 自分一人で考える方が楽しい。
- 私はグループディスカッションなどで知らない人へ発言するのも慣れていたが、今回発言している人が少なかった。
- グループ学習での人数は少なくした方がいいかもしれない。
- 仲の良い人とやりたい。
- 例をもっと増やしてほしいです。
- 意外と難しくなかった。コツをつかめば早かった。
- 全体的にあまり理解できていないのでもっと頑張ろうと思った。高校までの数学と勝手が違って少しやり難い。

⑨ 補足：後期アンケート結果

有効回答者数 43（人）

Q1 他の授業と比べてこのような授業は

やる気が出る	学習意欲に変わりはない	やる気にならない	その他
21	22	0	0
48.8%	51.2%	0%	0%
合計 100%			

Q2 他の授業と比べてこのような授業は

理解しやすい	理解のしやすさに変わりはない	理解しにくい	その他
11 25.6%	27 62.8%	3 7.0%	0 0%
合計 88.4%			

Q3 このような授業は

増やした方がいい	どうでもいい	必要ない	その他
21 48.8%	9 20.9%	3 7.0%	9 20.9%
合計 69.7%			たまにやるには新鮮で楽しいと思った。 1, 2回で良い。(類似解答複数) 基本はいつもの授業スタイルでたまにグループワークが良いと思う。(類似回答複数) そのままで良いと思う。(類似回答複数)

Q4 これまでの線形代数の授業と比べてどうですか？(どちらがいいか・良い点・悪い点など)

<考える力がつく>

- 自分で考える力が少し鍛えられるのかなと思いました。 ● 良い。普通に問題を解くより考えられる。
- 今まで教わったことを駆使して自分で考えるので、そういった力が他の授業と比べてつくと思うので、とても良かったと感じました。
- 他人と関わる大変さがあるが、自分で考えるため理解は深くなると思う。

<協働のメリット>

- 他の人の考え方を知ることができるのでとてもおもしろいと感じた。お互いに分からない所を以前のプリントなどから探して見つけていくという通常ではなかなかできない体験ができたと感じた。
- 自分がわからないようなことでも、他の人に助けてもらいながら解決できるので良い。
- 友達と一緒に考えるのでいろいろな意見が聞けていい。 ● いろいろな考え方があっておもしろい。
- グループのメンバーと話しながらできたので、自分では思いつかない発想も多く面白かった。
- グループワークはコミュニケーションができるので就活に役立ちそうで良いと思います。さまざまなアイデアを考えるのが楽しかった。普段関りのない人と協力して考えるのはとても新鮮だった。
- 人の意見を聞けるので考える幅が広がると思います。 ● 他の人と意見交換できて良いと思います。
- 色々な人と討論できて楽しかった。
- グループの人さまざまな意見を持っていて自分の考え方が広がったので良かったです。
- 他の人とやって自分が思いつかないことに気付けるのでやった方が良いと思いました。
- グループワークをやると、他の人の考えも知ることができるので面白い。
- 実際にグループワークをやってみて、何人かで作業するのと一人で考えるのでは全然違うので、グループワークを行うことは有意義だと思う。
- 普段仲の良い人意外と関わることで、新たな発見があった。いろいろな意見を聞くことにより、自分の考え方の幅を広げることができた。

<協働の困難>

- 問題をただ解くだけでなく考えるのが楽しかった。ただ、今までの内容がわかっていない人がいて少しやりづらかった。
- 他の授業と比べて、より自分の頭で考えたのでその点が良かったです。ただ、チームとして考えがつま

ってしまったときに困りました。

- 自分以外の意見が聞けることで理解が深まると思う。ただ、チームワークの連携が難しい。あらかじめリーダーや司会を決めた方が良い。 ● リーダーがいれば面白い。いない場合はとてもつらい。
- 色々な人と関りをもてるのが良いが、だれもが数学専門ではないので、教授から教えてもらった方が効率よく理解できた気がした。

<たまにで良い>

- 他人と相談する時間が増えるため、理解しやすいと感じた。しかし数回で良いとも感じた。
- たまにやる分には新鮮で楽しかった。 ● 通常の授業とグループワークの併用が良い。

<講義の方が良い>

- 普段の授業の方が一人で集中して学べるので個人的にはいつもの方が良い。 ● これまでの方が良い。
- 課題自体がよくわからなかったので対応できなかった。通常の授業の方が良い。
- 演習点が稼げるとい点では良いが、理解を深めるとい点ではいけない。

<どちらともいえない>

- どちらともいえない。 ● どちらでも良いと思います。

<その他>

- 計算だけでなく、グラフを書いたりしておもしろかった。 ● おもしろくてよかった。
- 演習でいつもより丸がもらえるのが良かった。

Q5 通常の講義のみの他の（線形代数以外の）授業と比べてどうですか？（どちらがいいか・良い点・悪い点など）

<グループワーク肯定>

- 講義+ eラーニング+グループワークを行うことで、理解が深まると思う。
- 自分で考えるだけでは分からないことを他の人と一緒に考えることで理解できるようになり、とても良い経験となった。 ● グループワークがあった方が楽しい。
- 集中できるから良い。他の授業と比べるとグループワークは良いと思う。
- 今回のようなグループの方が全員で考えを共有できたので良かった。
- グループワークを混ぜた方が新しい観点から見られるので良いと思います。
- グループワークを行う方が理解しやすい。
- グループワークのあるこの授業の方が、他の授業よりいい。良い点は他の学生と関われることで、今回私の場合は、チーム内に優秀な一年生がいて、刺激を受けたし、教えてもらったりもした。

<グループワークはたまにで良い>

- 毎回はキツイかなと思うので、普段はいつもと同じような授業で、たまにそういったグループワークがあると面白いなと思いました。 ● 1回くらいはグループワークはあっていいと思いました。
- グループワークをたまにすると楽しいです。 ● たまにやるならいいと思います。
- 1, 2回はあった方が良いが、そんなに多くはいらない。

<どちらともいえない>

- それぞれ良い点悪い点があるのでどちらともいえない。
- どちらも同じ感じなので、どちらが良いということはありません。 ● どちらでも良いと思います。

<講義の方が良い>

- 通常の方が受けやすさはある。 ● 通常の方が良い。 ● 通常の講義の方がいい。
- 最初に自分で理解するのができなくて、eラーニングの課題で苦労しました。

<その他>

- 聞くだけの授業より理解しやすいと感じた。 ● 良い。眠くならない。 ● やる気が出る。
- 講義のみよりも理解が深まり、勉強になった。 ● 自分で考える力がついて良いと思った。
- より考えることができるので良いと思います。 ● 講義だけの授業よりも断然理解が深まる。
- 自主的に考えなければならぬので通常の講義より良いと思った。今後もこのような授業があっても良いと思いました。 ● ただ聞くだけの授業と違い積極的に授業に参加できるので良いと思う。
- 自分の理解度を途中で確認できるのが、他の授業にはない良い点だと思う。

Q6 今回の「線形変換」の授業について、感想、コメント、意見等あれば書いてください。

- 楽しいです。がんばります。 ● 少し難しかったが楽しかった。
- 演習でも楽しくやれた。 ● 前に出て問題解くのは良いと思う。 ● 演習時間が多くて楽しいです。
- 1回で何人もの生徒をあててくださるので、高校のとき発言が苦手だった私のような人でも、手を挙げることができました。 ● 演習がたくさんあるのでありがたいです。
- やる気のある人は評価が伸びるのがわかるので非常に納得のいきやすい。また強制でない部分も良く、手を上げるのもみんな上げるので引っ込みがちな人でも挙げやすい。
- 毎回配られるプリントが充実していてよかった。eラーニングも予習復習に活用できた。
- 多くの問題があり、やれば力がつく点が良い。もう少し問題を解く時間が欲しい。黒板の字が小さくて見えない。
- 講義だけだと実際に理解できているかわからないので演習をやるのはすごく良いです。
- 正式な解答をポータルサイトの方にもアップして頂けると復習ができてありがたいです。
- 傘の図形が線形変換によって開いた図形になったのが面白かった。
- 変換した結果はグラフを書いてみないと想像できないものが多く、今までより難しかった。
- 自分で図形の変換を考えるのは意外と難しかった。
- 実際、図形を考えてから行列の式をたてようとする、うまくいかなかったりして難しいと感じることも多かったが、私はグループワークをあまりやったことがなかったので楽しめた。
- いろいろな形に変換できるというのは面白かったです。
- 内容が難しくなってきたので、少しゆっくりやってほしい。 ● 難しかったというのが正直の感想です。
- 授業の進みが早くて焦ったがなんとか理解できてよかった。

7 語学教育におけるアクティブラーニング

小川 睦美

① 当該授業名

英語2 (スピーキング&リスニング), 英語3 (リーディング)

② おおよその参加学生数

1クラス約32名

③ 目的

- 動画課題による授業時間の有効活用:特にスピーキング試験を個別に行うと時間がかかってしまうため、動画による課題提出はとても有効な手段である。
- 学生中心の授業内活動:ペアもしくは少人数のグループで取り組む課題を設定、各学生に授業内での役割を与えることで、授業への積極的な参加を促す。
- 授業外で取り組める課題の設定:英語は授業外での継続的な学習も重要なため、過度な負担とならない程度の教室外で取り組む課題を与え、その取り組みも成績評価に反映させる。

④ 事前準備・必要機材等

- LMS NUe
- 受講生のログインID・パスワードの配布
- スマートフォン(動画撮影用)

⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

【動画】

1年次スピーキング授業での中間試験として導入している。もしくは授業内でその日の学習のまとめとして動画課題を与えることも可能である。

- 課題内容は授業内で学習したフレーズや会話にし、試験として実施する場合は学生に復習しておくように指示する。
- 試験当日、学生はくじを引き、その場でペアを作る。時間節約のため、ランダムにペアを作るサイトを利用することも可能である。(サイト例:<http://www.aschool.us/random/random-pair.php>)
- 90分の授業時間内に出された課題(1~2分程度の会話3つ程度)を動画にとって、NUeの課題ページに提出する。ペアのどちらかのアカウントから提出する。
- 動画は大学構内のどこで撮影してもよい。
- 評価基準は、学習したフレーズや単語が使えているか、パートナーの目を見て話す等の会話としての自然さを対象とする。
- 図1は実際の課題ページ例である。ペアの名前を記入する欄を作り、各課題、動画ファイルのアップロード先を提示する。アップロードが完了すると「アップロード済みファイル」として紫のアイコンが表示される。ファイルは何度でもアップロードすることができる。「アップロード済みファイル」と記載はあるがアイコンが表示されない場合、アップロードが失敗している可能性があるため再提出するように指示する。失敗する原因として、「動画の容量が大きすぎる」、「アップロードが完了する前にページを移動する」といったことが考えられる。ネット環境であれば提出完了の確認はその場でできるため、ファイルがきちんとアップロードされているかどうかは、学生と一緒に確認した方がよい。
- 課題例:クラスメート紹介、道案内、イベントへ行く約束、レストランでの注文、家電の買替え(実際のイベントカレンダー、レストランメニュー、家電チラシを見ながらの会話)、宿泊ホテルでのトラブル対応等

図1 中間試験としての動画課題提出ページ例



【語彙学習：ボキャブラリービルダー】

1 年次スピーキングにおいて、授業外で英語を意識してもらうために実施している。

- 日常生活に関するボキャブラリーを調べる課題を毎週行っている。
- NUe のフォーラム機能を使って調べた単語や表現をクラスで共有している。図2 は実際の課題例である。
- 間違えた表現を書き込む学生もいるので、授業開始時に一緒にチェックし、説明もしくは写真を表示するなどして正しい表現を確認する。図3 は実際の提出ページ例である。誰が書き込んだのかを確認できるので、参加度合を成績評価に反映させる。
- 課題例：大学構内の物や場所、自分の部屋にある物、GW にしたこと、通学途中に目にするもの、テレビから流れてくる情報、一週間で食べた食べ物や飲み物、夏休みにしたいこと・行きたい場所、好きなレストラン・メニューの紹介等

図2 語彙学習ボキャブラリービルダーの課題ページ例

トピックタイトル	トピック作成者	返信数	イイね	評価	最新更新日	
Summer Vacation	小川 睦美	25	0	未採点 0	2017年6月7日(水) 13:55	削除
Food and beverage	小川 睦美	27	2	未採点 0	2017年5月24日(水) 13:19	削除
On TV	小川 睦美	30	0	未採点 0	2017年5月17日(水) 13:18	削除
On the way home	小川 睦美	28	0	未採点 0	2017年5月10日(水) 12:44	削除
On holiday	小川 睦美	44	2	未採点 0	2017年4月26日(水) 12:35	削除
At home	小川 睦美	19	2	未採点 0	2017年4月19日(水) 10:25	削除
On campus	小川 睦美	42	4	未採点 0	2017年4月1日(土) 16:00	削除

図3 語彙学習ボキャブラリービルダーの提出ページ例

The screenshot shows a web interface for a vocabulary learning tool. At the top, there's a navigation bar with 'At home' and a dropdown menu for 'コメントを段組みで表示'. Below this, a post by '小川 健美' from '2017年4月19日(水) 10:26' is displayed. The post title is 'Re:At home' and the content lists several Japanese terms with their English equivalents: 空気清浄機 = air cleaner, 絆創膏 = adhesive plaster, 貯金箱 = piggy bank, インターホン = intercom, and 掛け時計 = wall clock. Below the text are icons for 'コメントする', '修正できません', 'イイね 2', and '評価する 未採点 先生-'. A second post follows, dated '2017年4月20日(木) 07:45', with the title 'Re:At home' and terms: ふすま = bran, 下駄箱 = shoe cupboard, たんす = bureau, 換気扇 = ventilating fan, and まな板 = chopping board. It also has similar interaction icons. The third post, dated '2017年4月20日(木) 12:56', is titled 'Re:Re:At home' and includes a photo of a dark wood chest of drawers. The text explains that 'たんす' is generally 'drawers' or 'chest (of drawers)', and 'bureau' is often used to refer to a desk. It also notes that a wardrobe is referred to as 'wardrobe' in the third photo. The photo shows a dark wood chest of drawers with five drawers, standing in a room next to a bed.

【旅程表の作成】

1年次スピーキングにおいて、夏休み前に行っている。

- 航空券・ホテル予約サイト等 (expedia や booking.com) を英語で表示し、夏休みに行きたい場所と日程を検索して、現地での観光プランを立て、航空券・ホテル・観光・食費など実際にかかる費用の計算をする。
- 旅程表が完成したら、他の人の旅程について尋ね、自分も同行したいと思うプランを投票する。

【グループワーク】

2年次リーディングにおいて、毎回の授業時に行っている。

- 各ユニットで、異なるメンバーとグループを組む (1グループ最大4名)。
- Facilitator (進行役), Time keeper (時間配分), Presenter (発表者), Secretary (書記) の役割を決めて、授業内活動 (約45分) に取り組む。
- 各ユニットのリーディング記事について、読んだ内容を日本語で説明する課題を与える。英語で読んで理解できたと思っても、いざ自分の言葉で説明しようとするとうまくできない学生が多いので、しっか

り内容を理解し、自分の言葉で説明する練習として、日本語で課題を行っている。

- 活動時、教員は教室内を見てまわり、質問等があれば対応する。
- 回答はグループ単位でワークシートに書き込む (Secretary の仕事)。
- クラス全体の答え合わせで、各グループの答えを発表する (Presenter の仕事)。発表時の説明の仕方に注意するよう指導する (例: 最初に要点は何個あるかを言う、具体例をつける等)。
- 授業終了後、ワークシートを回収し、内容をチェックして翌週に返却する。

【語彙学習：ニュースボキャブラリー】

2年次リーディング前期において、語彙力強化と、定期的に英語で読む習慣を身に付ける活動として行っている。

- The Japan Times ST からの英語ニュースを取り上げ、ボキャブラリー問題を配布している。
- 音源、英文、日本語訳は課題ページに載せている。図4は実際の課題ページである。ニュースを読んだ後、ボキャブラリーの組み合わせ問題を解く。
- 毎週2つずつ記事を読むため、一回の課題は5分程度で出来るように設定し、通学途中や授業の空き時間でも取り組めるようにする。また、初回授業にて同教材を使用した音読の練習法を説明し、より効果的な学習のための自習方法を学生に教えておく。

図4 語彙学習ニュースボキャブラリーの課題ページ例

The screenshot shows a lesson page titled "News_9 June 2017_1". It includes a video player with a play button and a progress bar. Below the video is the article title "100 killed in attack on IS rebels in Philippines" and its English text. The Japanese translation follows. At the bottom, there is a matching exercise with two columns of boxes. The left column contains English words: "fend off ~", "scores of ~", "dire", "death toll", and "corpses". The right column contains Japanese phrases: "大勢の～", "死体", "死亡者数", "切迫した", and "～をかわす".

×中断

次のページへ進む

【要約】

2年次リーディング後期において、英語で読んだものを書いてまとめる力を養うために行っている。

- 学生は毎週英語で何かを読み、それを3～4文程度に要約する。図5は実際の課題ページ例である。課題は活動フォームを使用して設定する。新規登録ボタンを押すと、その日の活動履歴として残る仕組みになっている。図6は実際の記入ページで、タイトル、出典、要約を記入するように設定する。
- 読む内容は学生が自由に決める。
- 後期レポートテーマが「要約」であるため、その導入として行っている。
- 毎回の細かい添削しないが、内容はチェックする。レポート課題提出時には添削指導を行う。図7は学生の活動フォームの履歴一覧である。学生名簿から閲覧可能で、内容をチェックした後、評価として「合格」「不可」などのスタンプを押すことができ、一覧の左端にチェック済みのマークが記載される。

図5 要約の課題ページ例

トップページ / 英語3 / 活動フォーム

活動フォーム | ルーブリック | ポートフォリオ出力

Write a summary ← クラスに戻る

Read English materials, such as news, magazine articles, blogs, comics, books, etc.
Summarise what you have read in English. Include a title, summary, and the reference to the material.

e.g.
Title: A new finding about London Tube attack suspects
Reference: <http://edition.cnn.com/2017/09/18/europe/london-tube-terror-commute/index.html>
Summary: There was an attempt to blow up a London Underground train on Friday 15th September. Two men, an 18-year-old man and a 21-year old, were arrested on the next day. They had both been fostered by the same elderly couple, who were honoured by Queen for fostering children in 2010.

新規登録

<前 2017年10月 次>

月	火	水	木	金	土	日
25	26	27	28	29	30	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31	1	2	3	4	5

Date	Title	Reference	Summary	登録日時
活動フォームは登録されていません				

図6 要約の記入ページ例

Write a summary ← 一覧に戻る

Date	<input type="text" value="2017-10-18"/>
Title	<input type="text"/>
Reference	<input type="text"/>
Summary	<input type="text"/>

保存

図7 学生の活動フォーム履歴一覧例

Date	Title	Reference	
2017年11月20日(月)	Trump in China	Nese in Levels	[17-11-2017]President Trump visited China and received a premium state visit. He became the f
2017年11月20日(月)	Big Water in Greece	Nese in Levels	[20-11-2017]Greek authorities say that at least 15 people died in flash floods which debastated. Some locals are unhappy with the response from the district government. One resident said th
2017年11月14日(火)	President Xi Jinping	Nese in Levels	[01-11-2017]The Chinese President Xi Jinping became the most powerful Chinese leader since N
2017年11月6日(月)	Trump touts solidarity with Japan but refuses to shy away from trade	the japan times	NOV 6] Donald Trump emphasized America's "solidarity" with Japan against "the North Korean. After the summit, two high-ranking Japanese officials called the ocerall outcome a success. with
2017年10月30日(月)	Factory in Indonesia	Nese in Levels	[30-10-2017] A firecracker factory in Indonesia exploded with 103 workers inside. Forty-seven p
2017年10月23日(月)	Gun Control in Australia	Nese in Levels	[20-10-2017] In Australia, thousands of people turned in their firearms, including 52,000 unregis
2017年10月15日(日)	Situation in Spain	Nese in Levels	[10-10-2017] Catalonia, a region in Spain where the capital is Barcelona, held a referendum on its. After the referendum, the government ordered the national polecce back from Catalonia. The sit
2017年10月9日(月)	Women in Saudi Arabia	Nese in Levels	[2017-04-10]Saudi Arabia issued a royal decree which gives women the right to drive. The royal c. However, Saudi women still need a man's permission to travel, get job, divorce or marry.
2017年9月28日(木)	People in Germany Vote	Nese in Levels	[28-09-2017] Angela Merkel won her forth term as German Chancellor. Her party did not get a
2017年9月25日(月)	Earthquake in Mexico	Nese in Levels	A huge 8.2 magnitude earthquake hit off of Mexico on September thirteenth. Severe damage w. The death toll continue to rise and tsunami warning was issued in the wake of what the country

⑥ 実施する上での留意点

- グループワークやスピーキングの活動をスムーズに行うには、クラスの雰囲気が必要であるため、初めの2～3回分の授業では、できるだけ学生同士がリラックスして仲良くなれるような課題を設定する(例：大学構内を巡ってボキャブラリーを集めてくる、自己紹介動画、グループでのクイズ等)。
- 毎週の課題(ボキャブラリー、要約等)も成績の一部となることを説明し、しっかり取り組んでもらう。
- 前期終了時点での成績を渡し、自分に足りないものを把握した上で後期授業に取り組むように促す。

⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

【利点】

- スピーキング試験は、個別に行うとかなり時間がかかってしまうため、動画撮影にすると一回分の授業で済ませることができる。
- 動画課題は、繰り返しが見ることができるため、評価がしやすい。
- ボキャブラリー課題は、学生が電車の中でもスマホで取り組むことができる。
- 学生が知らない単語を辞書で調べた際、ニュアンスの違う不自然な単語を見つけてきたりするので、一緒に確認することで間違いを訂正することができる。

【難点】

- 動画撮影の際、画質を低くしないとアップロードに時間がかかる。
- ボキャブラリー課題は、少しの時間を利用してこつこつ勉強することが苦手な学生にとっては、毎週こなすのが難しい。

むすびに

今回の参加者数は、講習会 45 名、ワークショップ 23 名であり、参加者からは以下のような感想・コメントが寄せられた。

- LMS の利用の有効性を感じたので、どのような方法があるか興味があった。現在、初回の授業にマークシートにて口頭の質問に対して回答させ、すぐ回収。その結果を読み込んで次週からの授業展開に利用。自分の回答がその他の人に対してどうなのか知ることになるので学生の反応はいい。(けど教員の処理が大変なので LMS を利用できないか。)
- 貴重な機会をありがとうございました。"LMS"" アクティブラーニング"等重要なキーワードを授業で実践している事例について大変勉強になりました。ぜひ自身の授業においても、得たアイデアを利用させていただき、より良い授業の実践を目指したいと思います。ぜひ今後も、このような機会をいただければ幸いです。本講習会に関わる全ての皆様にお礼申し上げます。
- 発表者の先生方の取り組みを色々と聞くことができ良かったです。自分の担当する講義で何か取り入れられないか検討してみます。
- 各講義の性質ごとに工夫をされていることがよくわかった。講義によっては、LMS や「グループワーク」が有効の場合もあると感じた。グループワークは、ケースバイケースで個々の講義の特性や担当教員の方針で実施するか否かが大事である。
- 大教室では難しいが、ゼミでも活用できる手法が紹介され、役立った。
- LMS の機能や活用の事例を学ぶことができ、今後の参考になりました。グループワークの目的や運用について個別の事例ごとに参考点が多くありました。
- e-learning のマニュアルをぜひ作成していただければと思います。
- 講習会につきましては、LMS 等、まずは使用してその効果を実際に確かめる必要があると思いました。
- 金先生が大変上手く AL を取り入れておられて印象的だった。複数の方が LMS を使われていて自分も利用してみようと思う。
- 小川先生の動画の活用法がとても興味深かった。自分の授業でもできれば導入したい。
- 学習者間の相互学習(韓国語演劇)における学生のフィードバックが興味深かった。「もっと工夫したい」と学生自身が意欲的になっている点は「創造する」という作業が鍵になっているのではないかと考えた。

とくにグループワーク・グループディスカッションに関しては、以下のような感想・コメントが寄せられた。

- アクティブラーニングにおいて、他者から刺激を受け他者に刺激を与えることが重要。そのためにもグループワークはキーになる。その点、スポーツやゼミの授業等、果たす役割の大きさを感じた。
- グループディスカッションは、ゼミ等の少人数クラスでは効果が期待されると思いますが、大人数のクラスでは、グループ作りそのものが難しいと考えます。様々な科目、形態がありますが、グループディスカッションに向き不向きのあるものを、カテゴライズすることも可能かもしれません。基礎知識がない(土台がない)と議論ができないという部分については、議論をするために知識を得るという方向で進めざるを得ないと感じています。
- グループ学習は、積極的に参加する学生と消極的な学生がいて、その対応が難しい。グループ内で“小グループ”ができる可能性があり、グループ内のコミュニケーションがとれない場合があるとの指摘は納得。グループワーク成功の秘訣は、グループ内での準備、コミュニケーション。AL の体制も大事であるが、教員の熱意と学生への対応が最も重要である。GW は、教育効果を高める「一手段」であり「目

的」ではない。

- 評価の基準は？ 大人数授業でもグループワークは可能か？ という疑問を持ちました。色々と示唆をいただき、ありがとうございました。
- グループワークを有効に活用するための条件や目的・方法についてかなり理解が深まりました。機会をとらえてグループワークを取り入れてみたいと思います。
- グループワークという形式にはめ込まれて思考と発言を強要されるのが嫌でした。アカハラ、パワハラと思います。学生にたいしても、やるべきではないと思います。ありがとうございました。

また、講習会について、以下のような感想・コメントが寄せられた。

- 先生方が近く、親しく、話し合う機会をふやすことは、大変よいと思います。先生相互に心理的に近くなることは、FDの基本であると思います。今後も続けられることを期待いたします。
- 素晴らしいFD講習会だったと思います。工夫をさらにして頑張るって行って欲しいと思います。学生を自立した学習者に育てて行って下さい。

アクティブラーニングという概念や、本学のコンセプトである自主創造は、学生にのみ当てはまるものではない。われわれ教員にも当てはまるものである。自主的に学ぼうとしない、工夫しないような教員の言葉を学生は聞いてくれるだろうか？ 重要なのは教員の意識であり、そのための講習会のような場においては、強制ではなく、自主性を尊重すべきではないだろうか。参加を強制しても意識は変わらないし、持続しないだろう。できるだけ自主的に参加してもらえよう配慮や工夫をしつつ、少しずつでもできる限り継続していくことが重要ではないだろうか。

引用・参考文献

- 服部訓和 (2016) 「LMS の導入と評価：日本大学における e ラーニングの戦略的活用の研究 (商学部パイロットプログラム)」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 301-328.
- 福田弥夫, 関根二三夫, 池田実, 成毛信男, 鬼頭俊泰, 竹村亮, 芝村良, 佐藤健一, 山添謙, 大嶽龍一 (2016) 「日本大学における e ラーニングの戦略的活用に関する研究—日本大学理事長特別研究公開シンポジウム開催報告—」『日本大学FD研究』第 4 号, 111-127.
- 福田弥夫 (2016) 「日本大学における e ラーニングの戦略的活用に関する研究」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 167-170.
- 松下佳代, 京都大学高等教育研究開発推進センター編著 (2015) 『ディープ・アクティブラーニング：大学授業を深化させるために』第 1 版, 勁草書房, 東京.
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』第 1 版, 東信堂, 東京.
- 中野民夫 (2003) 『ファシリテーション革命：参加型の場づくりの技法』岩波書店.
- 成毛信男, 金指崇, 服部訓和 (2014) 「日本大学理事長特別研究入学前教育：TOEIC e ラーニング教材の開発とその評価」『総合文化研究』第 19 巻第 3 号, 日本大学商学部, 1-28.
- 成毛信男, 服部訓和 (2016) 「入学前教育：TOEIC e ラーニング教材の開発とその評価Ⅱ」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 221-258.
- 佐藤健一 (2016) 「日本大学理事長特別研究パイロットプログラム (2012～14) e ラーニングによる入学前教育の開発研究」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 197-220.

- 芝村良 (2016) 「大学入学前教育のための e-learning 教材の開発と実践—商学・経済学を学ぶための数学 (1) —」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 271-300.
- 竹村亮 (2015) 「LMS glexa を用いた論理学 e-learning 教材の開発」『総合文化研究』日本大学商学部, 第 21 巻第 2 号, 51-72.
- 竹村亮 (2016) 「e ラーニングを用いたアクティブラーニングの試み—LMS glexa を用いた反転授業—」『日本大学FD研究』第 4 号, 13-26.
- 竹村亮, 金雲鎬, 岡田太, 菅野正泰, 芝村良, 服部訓和, 根田正樹 (2017) 「大規模授業におけるアクティブラーニング—平成 28 年度商学部FD講習会報告— (活動報告)」『日本大学FD研究』第 5 号, 27-50.
- 堀公俊 (2004) 『ファシリテーション入門』日本経済新聞出版社.
- 山添謙 (2014) 「日本大学商学部における初年次教育に関する一考察—入学試験形態と初年次前学期の学修活動との関係—」『総合文化研究』第 19 巻第 3 号, 日本大学商学部, 29-45.
- 山添謙 (2016) 「日本大学商学部におけるパイロットプログラム受講者の学修状況」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 329-345.